

● 制作

[node] 親水への結び目 —佐鳴湖周縁部のリデザインによる地域再編—

三輪 将太郎

園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム (主指導教員: 武田 史朗)

MIWA Shotaro

1. 背景と目的

「グリーンインフラ」とは、社会資本整備や土地利用等のハード・ソフト両面において、自然環境が有する多様な機能を活用し、持続可能で魅力ある国土・都市・地域づくりを進める取組である¹⁾。

グリーンインフラとなり得る緑地は様々あるが、中でも「公園」は生態系の多様化や、ヒートアイランド現象の緩和、防災、歴史文化の保全などの機能において大きなポテンシャルを持っていると考える。しかし、現在の日本においては「公園」の持つ機能を最大限活用できていないと言え難い。その原因として財政状況の悪化による維持管理費の減少や職員数の減少に起因する消極的な公園管理が挙げられる²⁾。それらの問題に対し、昨今 Park-PFI など多様な主体の連携によりハードの充実を図る制度の活用は一定程度進み、先進事例や効果的な事例もあるものの、より柔軟に公園を使いこなすための管理運営に関しては、議論の余地があると言える²⁾。加えて、デジタル化の急速な進展や新型コロナウイルス感染症の拡大を契機とした新たな生活様式に対応した意義・役割についても深く考察するべきと考える。

本研究は水と緑が豊富な湖を有する総合公園(都市基幹公園)である佐鳴湖公園をケースとし、グリーンインフラの具体的な設計提案を行う。

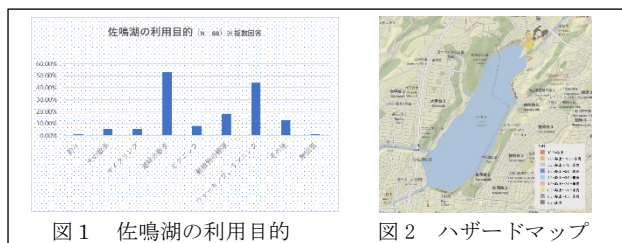


図1 佐鳴湖の利用目的

図2 ハザードマップ

2. 方法

現地調査及び文献調査により対象地の生態系、水質、周辺地域の現状などを調査分析した。その結果から、公園敷地内において、機能的、景観的な「結び」が認められ、かつ適切な操作で公園全体が周辺地域に対して効果的に機能する空間を抽出した。最後に対象地の地理的特性、公園および周辺地域への効果、環境への影響を考慮し設計した。

3. 対象地と調査・分析

設計対象地は静岡県中央区に位置する佐鳴湖公園である。佐鳴湖公園は市街地に囲まれ、水と緑に恵まれた総合公園

(都市基幹公園)。計画面積は 176.7ha であり、うち湖面が 120ha を占める。

公園内では約 100 種類の野鳥を一年通じて観察できる。また哺乳類ではタヌキやイタチ、昆虫ではトンボの仲間約 30 種類や蝶の仲間、魚類は、ウナギをはじめ約 50 種類が生息している⁴⁾。

佐鳴湖は下流の新川を通して浜名湖とつながっている。佐鳴湖と浜名湖の水は潮の満ち引きにより往来する。佐鳴湖から浜名湖までは長い距離があるので、佐鳴湖から出た水は満潮に向かうにつれ下流の川から流れてきたよごれも一緒に押し戻されて佐鳴湖に入ってくる。そのため、平成 13 年～18 年の 6 年間は全国で最も COD-Mn の値が高く、水質全国ワースト 1 となっていた。近年は下水道整備や水質浄化施設により改善の傾向にある⁴⁾。

公園の利用状況として公園利用者の利用目的調査(図 1)から、ウォーキングやランニング、散歩など園路を移動する活動が多く、公園の多くを占める湖水をうまく活用できていないと考えられる。

防災面での調査ではハザードマップ(図 2)から佐鳴湖北岸は津波の危険性があることが分かる。これは津波遠州灘から浜名湖そして新川を遡上してくるにより生じる被害である。

4. 提案の方向性

以上から、対象地の水質、防災面の課題、湖水有効活用の可能性が見出された。そこで本研究では公園全体を改装するのではなく、公園の機能的、景観的結びをリデザインし公園を地域環境の一部として結びつけ直すことで、空間の親水性を高め、周辺住民の生活の質を高めると共に人々の生態系や水質に対する関心の向上を図ることを基本的な方向性として定めた。

引用文献・参考文献

- 1) [環境：グリーンインフラ - 国土交通省 \(mlit.go.jp\)](http://mlit.go.jp)
- 2) [公園とみどり：都市公園の柔軟な管理運営のあり方に関する検討会 - 国土交通省 \(mlit.go.jp\)](http://mlit.go.jp)
- 3) [「佐鳴湖の水環境等について」アンケート結果 \[要約\] / 浜松市 \(city.hamamatsu.shizuoka.jp\)](http://city.hamamatsu.shizuoka.jp)
- 4) [佐鳴湖地域協議会 \(sanaruko-net.com\)](http://sanaruko-net.com)



コンセプト
「人と水と生態系を結ぶ。」
佐鳴湖のエントランスに位置する北岸で、人々が憩い、湖水や生態系に関心をもつ場を提供する。さらに、防災機能を持ち、地域と機能的に結びつきを強める。自然をデザイン的に落とし込んだ、迷彩模様をモチーフにして島と葦、湖水を配置した。自然を人工的に落とし込んだ迷彩模様を、もう一度自然に還元することで、生き物にも、人間にも快適な空間をめざす。

